

## 【論文】

# Max Frisch と Peter Suhrkamp

村上文彦

## 要旨

スイス人作家 Max Frisch にとって彼よりも20歳年長のドイツ人出版者 Peter Suhrkamp は掛けがえのない存在であった。作品を創作するたびに Frisch は Suhrkamp に判断を仰ぎ、その批評力を全面的に信頼し、作品を修正した。Frisch の作品がスイスのみならず、ドイツ語圏全体、さらには翻訳を通して全世界に読者層を広めることが可能となったのは Suhrkamp の適切な助言があったればこそなのである。この二人の関わりを取り上げたのが本稿である。

## はじめに

著名な Max Frisch 研究家の一人である Julian Schütt は「Frisch は二人の男を愛していた。それは Kurt Hirschfeld と Peter Suhrkamp だ」と断言している<sup>1</sup>。この主張に異議をはさむ者はいないであろう。Frisch の舞台作品を語るには Hirschfeld との関わりが重要であり、Suhrkamp と知り合った後の Frisch を語るには Suhrkamp の存在に触れずに論ずることは難しい。Peter Suhrkamp はあまりにも有名なドイツの出版業者ではあるが、その生涯は波乱に富んだものであった。そして彼こそが Frisch の潜在的な文学的才能を鋭く見抜き、それを引き出し、大きく開花させた優れた伯楽であった。スイス人作家 Max Frisch とドイツ人出版業者 Peter Suhrkamp、この二人の関わりは1947年11月から1959年3月31日、Suhrkamp が68歳でその生涯を終えるまで、約12年間続いた。Frisch は彼よりも20歳若く、二人は人生の先輩と後輩であったが、この二人の関わりは一人の作家と出版業者という仕事上の関わりを越えた、より深いものであった。Frisch はたくさんの作品を執筆したが、二人の親交があった時期の重要な作品はこの Suhrkamp の助言があって文学的価値をより高めることができたと言えよう。最も実り多い時期に Frisch はこの先輩から多くを学び、導かれたといっても過言ではない。Frisch を論じるうえで、この Suhrkamp の存在に触れずにその本当の価値評価には至らないであろう。

Lioba Waleczek によれば「二人の間の文通は199通に及んだがこれまでのところほんのわずかししか公にされていない」のである<sup>2</sup>。したがって限定された範囲ではあるが可

能な限り資料を渉猟し、この二人の関わりを詳細にたどって、Frisch にとって彼の存在がどれほど大きく、重要であったかを考察したい。

## 1. 出会い

Frisch と Suhrkamp の関わりについて言及する前提として、Frisch と Kurt Hirschfeld (1902-1964) の関わりについてまず触れておくべきであろう。第二次世界大戦が終了した2年後の1947年11月、当時36歳で建築家にして作家であった Frisch はチューリヒ市の野外プールの設計コンテストに優勝し、同年8月にはその工事も始まり多忙な中ではあったが、Hirschfeld と共にドイツへ旅行した。

実はそれからさかのぼること3年前の1944年、当時33歳の Frisch は9歳年長の、見ず知らずの Hirschfeld に路上で声をかけられ、ドラマ作品の執筆を勧められた。それには当時すでにシャウシュピールハウス劇場の支配人であった Oskar Wälterlin<sup>3</sup> の意図が働いていたことは恐らく間違いないであろう。この Wälterlin は若い頃バーゼル大学で独文学や演劇学を学び、『シラーと観客』というテーマで学位を取得し、バーゼル市立劇場やフランクフルト市立劇場などでその経歴を磨いてきた。彼はその頃シャウシュピールハウス劇場の舞台監督にして支配人であり、単に劇場体験が豊富な演劇人というだけではなく、経理部門も含めこの劇場ですべての実権を握っていた。彼こそがシャウシュピールハウス劇場の方向性を決定する力を持っていたのである。その彼のもとで文芸部員として働いていたのがユダヤ人である Hirschfeld であり、彼が独断で Frisch に誘いをかけるような行為に出たとは考えにくい。そこには必ずや Wälterlin の意図が働いていたと断言できる。しかし、建築家としてはともかく、その時点での Frisch の文芸面における実績としては、ジャーナリストとして『Neue Züricher Zeitung』にアイスホッケー世界選手権のレポートを寄稿し、„Kleines Tagebuch einer deutschen Reise“, „Tagebuch eines Soldaten“ などの散文を単発か数回程度の連載、その他に „Antwort aus der Stille. Eine Erzählung aus den Bergen“, „Blätter aus dem Brotsack“ などを発表していたにすぎなかった。これらのほとんどは報告、ドキュメンタリーなどであり、この Frisch にドラマを執筆する能力がどれほどあるのか、全くの未知数であった。新聞や雑誌の記事や散文作品を執筆した経験はあっても、作品制作上様々な制約がある舞台作品をまだ一度として書いたことのない若者に、商業劇場の作品を書かせてみる、それはあまりにも大きな冒険ともいえる。新作を舞台に上げるのはことさら慎重であらねばならない。商業劇場には失敗は許されないのである。そこにかかわる様々な人たちの生活がかかっており、危険性のある冒険はよほど成功の確率が高くなければ踏み切れるものではなかった。

Wälterlin たちは古典的な世界劇場を目指しつつも、ナチに禁じられた、あるいは迫害された作家たちを受け入れていた。第2次世界大戦前から戦中にかけて、ナチに制圧された地域を除けば、ドイツ語で上演できる劇場はスイスに限定されていた。もちろんナチの権力が及ぶ場所ではナチの厳重な監視があり、自由な作品発表は不可能であった。

その点、スイスは一応永世中立国であり、ナチの権力外に位置していた。しかしその強力な隣国による精神的な圧迫は常に感じ続けており、スイスの国民は戦争がはじまった場合にはドイツ軍がスイスに侵入してくるであろうと嚴重な警備体制を敷いており、Frisch も砲兵として従軍したりもしたが、ともかく言論の自由は存在していた。そのスイスで最も大きな都市、首都ベルンの約3倍の規模の町チューリヒ市の代表的劇場であるシャウシュピールハウス劇場が世界でもっとも重要なドイツ語の劇場となったのは当然であろう。この劇場の幹部たちが Frisch に目をつけたのである。それを知る由もない Frisch にとっては思いもかけない出来事で、いわば青天の霹靂ともいふべきことであったが、突然のこの申し出は彼を驚愕させると同時に彼の創作意欲を強烈に刺激した。Frisch はそれまでただ一つのドラマ作品も執筆したことはなかった。私生活では11月に第2子の長男 Hans Peter も誕生し、多忙な日々を送っていた彼は、忙中に閑を作りドラマ作品の執筆を開始するのである。この誘いがなければ彼が舞台作品を執筆する機会は相当遅れたか、あるいは執筆せずに終わっていたことも考えられるのである。ともかく、このことがきっかけで Frisch は舞台に目を向けることが可能になったのである。演劇への扉が開かれた Frisch はそこで立て続けにドラマ作品を執筆し、それらは Hirschfeld が所属していたチューリヒ市のシャウシュピールハウス劇場で上演されていったのである。彼が活躍の場を散文作品の世界だけではなく、舞台にも広げることができたのは偏にこの Hirschfeld の後押しによるところが大きい。彼の演劇面での才能の豊かさは、何作かの作品を執筆することによってすぐに明らかになるのである。そして Frisch がその後 „Andorra“ のような鋭いドラマ作品を作り上げることができたのは Hirschfeld の助力なしには考えられないのである。そして見知らぬ人から路上で声をかけられるという一見ユーモラスに思えそうな二人の最初の出会ひの逸話は微笑ましいという類のことではなく、実は深刻な意味を含んでいた。そもそも Hirschfeld はユダヤ系ドイツ人で、1930年以來ドイツのダルムシュタット市にあるヘッセン州立劇場に文芸部員として所属し、舞台監督としても活躍していた。しかし1933年ナチが政權を掌握すると解雇され、ベルリンの友人のもとに身を寄せたが、その後いったんスイスに渡り、さらにその後特派員としてモスクワに滞在し、そこで助監督の職に就いたが、彼の同僚がナチに捕まり射殺されるということが起こったのを機に再びスイスに戻り、Oskar Walterlin のもとでシャウシュピールハウス劇場に関わるようになっていたのであった。Hirschfeld は1964年に62歳でこの世を去ったが、その追悼の際に語った Frisch の言葉の中に Hirschfeld の悲しく辛い日々が浮き彫りになっている。ナチに追われた形で亡命者としてチューリヒで暮らしていた彼はドイツの国籍を失い、無国籍者であった。異国で頼る者もない孤独な亡命者である彼は、期限付きの定住許可者であり、少しでも法に触れば即座に国外に追放となってしまう身であった。常に正しく、忍耐強く生活しなければならず、どこかで監視されていることを絶えず意識し続けていなければならなかった。どんな時にも用心していなければならぬ者の研ぎ澄まされた注意深さが、人目につかぬように路上で Frisch に声をかけさせたのである<sup>4</sup>。Hirschfeld は誠実に Frisch に接し続け、Frisch はその後 Hirschfeld に全幅の信頼を置くようになり、彼らは終生互いに裏切るこ

とはなかった。例えば Frisch が外国旅行をしたときは、チューリヒに帰ってくるとまずシャウシュピールハウス劇場に Hirschfeld を訪ね、その後にはじめて帰宅するほどになったのである。信頼の強いきずなで結ばれた二人の友情は1964年 Hirschfeld が肺がんでその生涯を閉じるまで、約17年間続いたのである。Hirschfeld は1946年にシャウシュピールハウス劇場の副支配人となり、1961年に Walterlin が逝去した後には同劇場の支配人となった。他の劇場から監督就任の打診を受けても彼はこの劇場にとどまり続けた。彼は、一度として Hitler に屈従したことのないこの劇場に誇りを持っていたのである。生涯彼はスイス国籍を取得しなかったが、1948年彼が監督にと請われていたベルリンに Frisch と共に旅行し、スイスに再び帰ってきてバーゼルで国境を越えた時、「ありがたい、我々は再び故郷にもどった」と言ったのを Frisch は新鮮な驚きをもって受け止めた<sup>5</sup>。スイスの方言を覚えようとはしなかった Hirschfeld が精神的にスイスとそれほどまでに強く結びついているのを再確認し、さらなる親近感を覚えたのである。この二人の関わりについては様々な批評家たちが類似した指摘をしているが、たとえば Lioba Waleczek は「Kurt Hirschfeld との出会いと友情が彼に劇場への道を開いてくれた一方で、Peter Suhrkamp は彼を散文作家へと押し上げるのである」と述べている<sup>6</sup>。まさにその通りの Frisch と Suhrkamp の関わりが強い信頼関係のもとに発展していくのである。

Hirschfeld の勧めから5週間後には第1作目 „Santa Cruz. Eine Romanze“ を完成させ、さらに3週間後に第2作目 „Nun singen sie wieder. Ein Schauspiel aus der Gegenwart“ を Frisch は完成させた。1945年3月29日、シャウシュピールハウス劇場でまず „Nun singen sie wieder. Versuch eines Requiems“ を Kurt Horwitz 演出で劇場初上演し、翌1946年3月7日、同劇場で „Santa Cruz. Eine Romanze“ を Heinz Hilpert 演出で初演。さらに10月19日、同劇場で „Die Chinesische Mauer. Eine Farce“ を Leonard Steckel 演出で初演。その間二人の信頼関係はより深まり、多忙な中ではあったが、1947年11月に Frisch は Hirschfeld と共にドイツへ旅行した。そしてベルリンからの帰路、彼らはフランクフルトに立ち寄った。当地の証券取引所ホールで上述の Heinz Hilpert 演出による Carl Zuckmayer の „Des Teufels General“ の初演を見るためであった。観劇の後、当時フランクフルト大学の図書館長であった Hans Wilhelm Eppelsheimer の家で Zuckmayer を通して Frisch は Peter Suhrkamp と知り合ったのである。Suhrkamp はダルムシュタット劇場の文芸部員だった時以来 Carl Zuckmayer と親しくしていたのであった。Frisch は „Tagebuch 1946-1949“ の中でその時の高ぶった気持ちを次のように記している。

「ある古くからの友人の書斎での夕べ、マイン河が見渡せる、我々は食べ物をほどき、すべては自明のことなのだ、我々はここで眠ることもできる、生き生きとした楽しい会話が3時まで続いた<sup>7</sup>。」

この記述に Frisch が Suhrkamp との初めての出会いでいかに充実した時間を過ごしたと感じているかが推測される。この時、Frisch は36歳、Suhrkamp が56歳であったが、互いに完全に意気投合したのである。Suhrkamp は Frisch の作品がスイスという限定された地域でのみ受け入れられるのではなく、ドイツ語で作品を執筆している以上ドイツ語圏全体に受け入れられるよう創作の視点を変えるべきであることを助言したのであ

る。すでにこの時点で Frisch の散文作品を読んでいた Suhrkamp は Frisch に可能性を感じていた。鍛えれば一流の作家になれる男だと確信していたのである。それゆえのアドバイスであった。時には辛辣な評価も下すそれらの助言に Frisch が耳を傾けさらなる努力をするかどうかがかぎであったが、結局二人の間柄は Suhrkamp の考えていた通りに進むことになるのである。Volker Weidemann はこの Suhrkamp を『Frisch 発見者<sup>8</sup>』と名付けているが、けだし名言である。

## 2. Peter Suhrkamp とは

Peter Suhrkamp は、1891年3月28日、ドイツ北西部ニーダーザクセン州のキルヒハッテンで農民の子として生まれた。Peter は通称で子供のころからもっぱら Peter で通っており、成人したのちにも Peter を公に名乗っていたが、正式名は Johann Heinrich Suhrkamp である。父親は Johann Friedrich、母親は Elise Katharine で、1889年に結婚し、Peter が生まれた時父親は36歳、母親は23歳であった。Peter は長男で、彼には3人の弟と2人の妹がいた。キルヒハッテンで学校に通い、父親から農作業を学んだ。その頃秘かにヴァイオリンの手ほどきをしてくれる先生がいて、自分も先生になりたいという願いを持ったが、父に知られ、禁じられてしまった。それでも彼は教員養成所入学の書類を入手したが、「男の子は農民になるのだ」と父親は反対した。しかし Peter は秘かにその書類を書き送り、オルデンプルクでの試験に合格したが父親は激怒し、家にとどまって農業を継ぐか、家を出ていくかどちらかを選択するよう強いたのである。Peter は決然として家を出てオルデンプルクの教員養成所に入学したが、自立するためある公証人のもとで6時から10時まで働き、複写の作業に従事した。1905年から1911年まで教員養成所で学んだ彼は、若干20歳で小学校にあたるフォルクスシューレの先生になった。1913年には女教師の Ida Pläger と最初の結婚をし、翌年2月に娘 Ursula が誕生するが、結婚生活はうまく行かず、1918年12月5日には Ida が亡くなり、Ursula も1936年肺病で若干22歳にしてこの世を去るのである。Peter は1914年プレーメンでアビトゥア<sup>9</sup>も遅れて取得した。同年の秋からベルリンの大学で学業を始めようと考えていたが、第1次世界大戦の勃発がその計画を妨げた。23歳で志願兵となり、西部戦線で軍務に従事したが、優秀な歩兵であった彼は大隊の斥候隊長に任命され、その功勞によってホーエンツォレルン王家の刀剣付き騎士十字勲章を授けられた。しかし、前線での激しい体験が原因で神経虚脱に陥ってしまうのであった。第1次世界大戦後、彼はハイデルベルク大学や、フランクフルト・アム・マイン大学や、ミュンヘン大学でドイツ文学を学んだ。そのかわら、彼はオーデンヴァルトの学校や、自由学区ヴィッカーズドルフで教師として勤務した。1919には Irmgard Caroline Lehmann と結婚、1920年に息子 Klaus Peter が誕生するが1923年3月離婚。その間、1921年から1925年まで彼はダルムシュタットの州立劇場で文芸部員や舞台監督として雇用されていた。とりわけこの舞台での経験が後になって Frisch に的確なアドバイスをする上で有効であった。そして1923~24年はオペラ歌手 Fanny Cleve と極めて親密な関係があった<sup>10</sup>。このころ彼は2部構成の „Löwenzahn“

という作品を発表し、作家としての試みも行っているが、大成することはなかった。また演出家としてトルストイ、ストリンドベリ、ウェデキント、ブロンネン、タゴール、チャーホフなどの作品を手がけた。だがこれらの仕事を通して彼は、自分の演出力に限界を感じていた。そして、自分で創作したり、演出したりする世界から別離したのである。彼は再び教育界に戻り、1925年から1929年までは自由学区ヴィッカーズドルフで教鞭をとり、その間1926年からはその教育長となったが、ここでも彼はそれを天職とは感じる事ができず、1929年教師としての職業を最終的に断念し、ベルリンに移住した。そこで彼はベルリン日刊新聞『Berliner Tageblatt』やウルシュタイン社で発刊していた月刊雑誌『Uhu』（ワシミミズクの意）のフリーの寄稿者として働いた。そしてそれらの活動の後の1932年、Suhrkamp は『S.Fischer 出版社』の一員となった。このことが彼のその後の人生を決したと言えるであろう。

この出版社で Suhrkamp はまず雑誌『Die Neue Rundschau』の編集者として働きだし、1933年秋には取締役役に任命され、経営陣の一人となった。Suhrkamp は創立者の Samuel Fischer と一緒に仕事をした期間は短かったが、「私は彼の最後の数年間一緒に仕事をすることを許されたのは大きな幸せであった」と述べている<sup>11</sup>。Suhrkamp は Samuel Fischer に親しみを感じていたのである。そして1935年9月12日、Suhrkamp は音楽研究家 Van Hoboken と離婚していた女優の Annemarie Seidel と3回目の結婚をした。彼女は Suhrkamp を助け、Frisch とともに夫婦ともども親交を結ぶことになるのである。このころ彼は様々な作家たちと親交を持ったが、とりわけ関わりが深いのは Gerhart Hauptmann (1862-1946) と Hermann Hesse (1877-1962) であった。そして時あたかも時代は国家社会主義ドイツ労働党が勢力を伸ばし、Hitler が政権を掌握した時期であった。

Suhrkamp が所属していた S.Fischer 社はそもそも Samuel Fischer が1886年にベルリンに設立した出版社であった。Samuel Fischer (1859-1934) はユダヤ人の商人 Carl Fischer の5人兄弟の3男としてハンガリーで生まれた。出版業の知識を身に付けるため1874年にウィーンに出て6年間学び、1880年ベルリンに移り、Hugo Steinitz の Central-Buchhandlung で徒弟として働き、1883年9月にはそこで共同経営者になった。そして1886年、自身の S.Fischer 出版社を立ち上げたのである。彼には音楽を愛好する娘 Brigitte (愛称 „Tutti“) がいたが、彼女は音楽仲間である Gottfried Bermann (愛称 „Goffy“) と結婚した。Bermann は医者であったがその経歴を捨てて義父の S.Fischer 出版社の業務に関わることになったのである。そしてその出版社に Suhrkamp が所属したのである。Samuel Fischer は1934年10月15日ベルリンでその生涯を閉じたが、その後は Bermann と共に Suhrkamp がこの出版社を背負っていた。しかし、ナチの力が増大するのに並行して出版社にはあらゆる形での制限、嫌がらせ、検閲などが行われるようになり、ドイツでの出版事業の継続が困難になり、さらに激しさを増すユダヤ人迫害に身の危険を感じるようになり、Fischer 一家はとりあえずベルリンからウィーンに移動せざるを得なかった。そして Bermann は家族と共にウィーンへ亡命することになるのである。そのウィーンで彼は新たに Bermann-Fischer 出版社を立ち上げ、ベルリンの

S.Fischer 出版社は Suhrkamp が経営していくことになったのである。しかし1938年の独逸合邦によりその事業の継続は突然不可能になり、Bermann 一家はさらにイタリアへ、そこからスイスへと逃れ、さらにストックホルムで出版業を継続することになるのである。彼らはさらに迫害を受け、ついに1940年にはニューヨークにまで移住することを余儀なくされたのである。

Suhrkamp は S.Fischer 出版社に入社して僅か1年後、ウィーンへの亡命する Gottfried Bermann Fischer によって外貨に両替されることができなかった S.Fischer 出版社の一部を買ったのである。Fischer 家の人々はこの出版社を任せられるのは Suhrkamp しかないという人物評価で一致していたのであった。ユダヤ系の会社や商店が強制的に二束三文で売られていってしまう時代に、Suhrkamp は慎重だった。しかし Suhrkamp は Samuel Fischer が創設したこの出版社を守らなければならない、という愛社精神も持ち合わせていたのである。

1952年から Suhrkamp の下で働き出し、Suhrkamp の死後 Suhrkamp 出版社を引き継いだ Siegfried Unseld (1924-2002) はやはり Frisch と厚い親交を結んだ一人である。Unseld は1924年ウルム市に生まれ、第2次世界大戦中はドイツ海軍航空隊員としてクリミヤ、そしてブルガリア、さらにギリシャに派遣されたが、戦後故郷ウルムの『Aegis 出版社』で見習い修業をはじめ、その後出版者 Paul Siebeck のもとで働き、同時に大学でドイツ文学、哲学、図書館学などを学んだ後、1951年からブレンツ近郊のハイデンハイムで書籍出版業者として働き始めた。そして同年10月23日に Peter Suhrkamp と出会い、翌1952年1月7日から Suhrkamp の下で働き始めたのである。1955年には Suhrkamp から代理権を与えられ、同年7月から8月にかけて最初の渡米をした。ハーバード大学で Henry Kissinger が国際的なサマー・セミナーを設けており、彼は旧知の Hermann Hesse と Suhrkamp の推薦状を得てそのセミナーに参加することができたのである。その後1958年彼は Suhrkamp 出版社の共同経営者となり、1959年に Suhrkamp が死去した後は単独の経営者となったのである。

Frisch はこの Unseld とともに、とりわけ Suhrkamp 亡き後、強い信頼関係を結んだ。1970年5月2日 Frisch は、当時アメリカ大統領 Richard Nixon の下で国家安全保障問題担当補佐官を務めていた Henry Kissinger をワシントンのホワイトハウスに訪ねたが、この時同席していたのが妻の Marianne と Unseld であった。Unseld はこの訪問の実現に一役買ったとみられる。

Unseld は2004年に『ある出版者の伝記』というサブタイトルを付した詳細な『Peter Suhrkamp 伝』を刊行しているが、その中で「Suhrkamp と長く接していた人たちは Samuel Fischer がいかに Suhrkamp にとって手本であったかを知っている」と記している<sup>12</sup>。Samuel は出版業者としてあらゆる面で Suhrkamp にとってのお手本であったのである。しかし過激な時代ゆえに、1942年初めにはすべてのユダヤ系の名前は抹消されなければならないという命令が来ていたという。この指示は S. Fischer 出版社にも該当したのである。しかし Suhrkamp は出版社の改称に同意することはせず、社名から „S.“ のみを省いた „Fischer Verlag“ とすることを自ら提案した。しかしこの要求が宣伝省に

よって拒絶され、さらに社名を „Fische Verlag“ とする案も拒否された時、„Suhrkamp Verlag, vorm S.Fischer“ にしようと決心するが、これもまた変更を指示されることになるのである。さらに彼の出版社から出している一連の作家シリーズ、たとえば Otto Flake, Manfred Hausmann, Hermann Hesseなどを、これ以上出版するなという指示を宣伝省から受けるのである。しかし Suhrkamp はこの要求に従わず、やりくりがつく限り依然としてこのシリーズを出版し続けたのである。それどころか彼は1943年には Otto Flake の新しい小説 „Das Quintett“ を出版した。すると同年春に総統の秘書であり、党の官房長であった Martin Bormann が出版社の閉鎖を要求したのである。しかしこの時 Josef Goebbels と Bormann との間が非常に緊張状態にあり、Suhrkamp はそれを利用して Goebbels による閉鎖要求を思いとどまらせることができたという。具体的にどのような方法を用いたのかは明らかにされていないが、その後 Suhrkamp はナチ党員たちに対し、攻撃にさらされる面を可能な限り僅かしか見せないようにと努めなければならなかった。しかし1942年秋にゲシュタポのスパイ、Dr. Reckzeh が Suhrkamp の出版社に送り込まれたのである。Suhrkamp はこの男がスパイだとは見抜けなかった、と後に告白している<sup>13</sup>。この男は偽名を使い彼に近づいてきたのである。Unselde によれば「この男は他の人々を拷問吏や死刑執行人に引き渡すことに異常な喜びを感じる連中の一人で、回し者と言われる類の男だった。当時の権力者たちが誰かを法律上の手段ではうまく処理できなかった時、彼らはこの男を差し向けた」という。Suhrkamp の場合も同様であった。この男が出版社に足を踏み入れた瞬間に Suhrkamp の運命は決してしまっていたのである。彼はほどなく、1944年4月13日国家反逆罪で秘密情報機関から逮捕され、とかく評判の良くないゲシュタポの刑務所支所 Ravensbrück に連行されたのである。そこでどのような扱いを受けたかは想像に難くない。7月14日まで厳しい尋問が行われ、そこからベルリンの未決監 Alt-Moabit12A に連行され、10月22日に未決監から釈放され、再びゲシュタポに引き取られ、ゲシュタポの刑務所に移され、さらに1945年1月25日にザクセンハウゼンの強制収容所に移送されたが、そこで両肺と、胸膜炎の病にかかり、隔離監房に入れられ、病気が最も重くなった2月8日の夜遅く、突然釈放されたのである。それはナチスドイツが連合軍に降伏する僅か3か月前のことであった。

Suhrkamp は過酷な扱いを受けながらともかくも生き延びたのである。そして Samuel Fischer が創設した出版社を命がけで守り、自分を評価してくれた人たちに信義を尽くしたのである。過酷な日々の中でその肉体は病に侵されながらも、結局出版社は生き残り、彼は出版界に戻ることができた。そして以前の仕事を継続することが可能になったのである。1945年10月8日、ベルリンのイギリス軍政府から出版の認可を受け、企業の再建をはじめ、Bermann Fischer と提携し、出版業を再開し出したが、その後1950年、彼は Fischer 社から独立し、Hermann Hesse の協力の下に自分の名を付した出版社を立ち上げたのである。彼の妻 Annemarie Seidel も企画顧問並びに翻訳者として協力参加した。そして、それまで Fischer 社から作品を出版していた48人の作家達は、今まで通り Fischer 社か、それとも新たな Suhrkamp 出版社か、今後どちらの出版社から作品を出版するか選択権があった。そしてその48人のうちの一人であった Max Frisch のもとに



もどちらの出版社にしたいのか決定を要求する書簡が届くのである。Volker Weidemannによれば、5月17日付の書簡で Frisch は「創設される Suhrkamp 出版社に私の原稿をお渡しするのは当然のことと思います」と返信し、Suhrkamp はとても喜んで感謝の礼状をよこしたが、その中で、Fischer 社の Gottfried Bermann が Hermann Hesse を引き留めようと Hesse を訪ねてきたが、Hesse は Suhrkamp 社にするつもりだと答えた。Suhrkamp に電話をかけてよこしたことを伝えている<sup>14</sup>。そして Frisch も含め、48人のうちの33人が Suhrkamp への協力を賛意を示したのである。この33人の中には Frisch のほかに例えば Hermann Hesse や、Theodor Wiesengrund Adorno や、Bertolt Brecht や、Martin Walser や、Carl Zuckmeyer や、Thomas Stearns Eliot などなどの錚々たる作家たちがいた。ここに Suhrkamp の人望がいかに厚かったかが 顕著に表れているのである。

その後 Suhrkamp 出版社は発行される作品の質の高さでドイツ一流の出版社となった。そして1957年、Suhrkamp は言語並びに文学のドイツアカデミー名誉会員となった。さらに上述のように1951年には Siegfried Unseld が企画顧問として加わり、20世紀ドイツ文学、外国文学、そして人文科学を中心に活動の幅を広げ、とりわけ独学でデザインの技術を身に着けた Wilhelm August Fleckhaus (通称 „Willy“<sup>15</sup>) による装丁の美しさも好評を博し、順調に業績を伸ばし、ドイツを代表する出版社となったのである。

### 3. Frisch と Suhrkamp

上述のように1947年 Frisch は Kurt Hirschfeld と共にベルリンへ旅行をし、その帰路でフランクフルトに立ち寄った際に Suhrkamp と知り合った。Suhrkamp はこの時点ですでに Frisch の作品に目を通していて、この若い作家に大きな可能性を感じていた。さらに彼の妻 Annemarie も Frisch の持つ潜在的な能力を高く評価していた。このころ Frisch はチューリヒの Atlantis 出版社から „Tagebuch mit Marion“ という作品を出版したが、彼はこの『Tagebuch 形式』での執筆を継続して、そのスタイルを完全に自分のものにしたいという希望を持っていた。それはタイトルこそ „Tagebuch“ (『日記』) と付しているが、その日のできごとなどを記してゆく所謂『日記』ではなく、一定の貫かれたストーリーもなく、思いつくままに記述する、散文作品の集合体とも呼ぶべき作品スタイルである。そのスタイルは、建築業も営み、多忙だった当時の彼にとって最も重要な執筆形式であった。Suhrkamp は Frisch にその執筆の継続を熱心に勧め、さらにスイスに地域限定せず、ドイツでも出版することを勧めたのである。とりわけこの執筆スタイルが気に入っていた Frisch にとってはうれしくありがたい話であった。そしてチューリヒに戻った Frisch は、その時点でまだ関わりのあった Atlantis 出版社のスイス人出版業者 Martin Hürlimann<sup>16</sup> に対して、„Tagebuch“ スタイルを継続し、自分の作品をスイスだけにとどまらず、ドイツでも刊行したいという思いを口にした。しかしその時、その話に全く気乗りのしない Hürlimann は、ドイツの読者が彼の „Tagebuch“ に興味を持っていると何処から知ったのかを尋ねた。この時点でこの話にそれ以上の進展はあり得なかった。同じ出版業者のドイツ人 Peter Suhrkamp から聞いたとは Frisch が言える

はずもなかった。そして、これが Frisch と Hürlimann との協力的関係の終焉であり、同時に Frisch と Suhrkamp の新たな協力関係の始まりであった。Hürlimann にとってはそれがどれほど大きな損失になるかは思いもしなかったのである。だが、Suhrkamp もまた Frisch との関わりがどれほどの利益をもたらすかなどということは思いもしなかったのである。Suhrkamp にとっては発行する書籍の売り上げよりも、Frisch に素晴らしい作品を書かせることのほうがはるかに価値のある、やりがいのあることであった。打算ではなく、一人の作家を育て上げることがより重要であったのである。まだまだ出し切っていない Frisch の持つ潜在的な才能を可能な限り引き出し、厳しく育て上げ、大きく開花させる、そのことに Suhrkamp はやりがいを感じたのである。Julian Schütt は次のように指摘している。

「Frisch の持つ真の可能性は Peter Suhrkamp が発見したのである。彼がいなければ Frisch は可能性を永遠にスイスで低下させ、開業していた建築業に長すぎるほど関わり続けていたということは十分にありえたであろう<sup>17</sup>。」

この指摘こそがまさに二人の関わりを的確に表現している。まだまだ未完成の Frisch の才能を見抜き、道しるべのように進むべき方向を示し、彼を引っ張り、後押しし、ある時は励まし、ある時は叱り、坂道を押上げ続けた Suhrkamp の助力によって、Frisch はさらなる高みへと到達することができた。したがって Frisch の年譜をじっくり見つめれば、この Schütt の指摘の的確性は誰にも否定できない。Frisch は Suhrkamp に出会わなければ、それまでの生活を継続し続ける可能性が極めて大きかった。建築家としての才能を高く評価され、昼は建築業、夜は創作に励み、とりわけ何の不自由もなく、裕福な妻と3人の子供に囲まれた市民としての生活はそれなりの充実感があり、あえてそれを変える必然性は低かったであろう。だが彼が過ごしていた多忙な日々は、その継続は望めても、さらにその密度を高めることは、とりわけ文筆の面で彼が独力のみで誰の助けも借りず、より高度な世界に入っていく可能性はおそらく極めて低かったであろう。可能ではあるにしてもそこに至るまでにはより多くの時間がかかったであろう。そもそも脱皮そのものに気付いたかどうかも分からない。Frisch にとって文学的にさらに成長するには今までとは違った何らかのきっかけが必要であった。そのきっかけとは紛れもなく Suhrkamp との出会いであったのである。したがって Frisch にとっても最も良い時期に Suhrkamp と出会ったと言える。その時点で彼は30代前半で、まだまだ柔軟性があり、作家として固まる前の時期で、Suhrkamp のアドバイスに耳を傾ける謙虚な姿勢と、何よりも素直さを持っていた。彼は作家としての成長期を迎えていたのである。まさに Suhrkamp はそこに気づき、脱皮の手助けをして Frisch を一流の作家のレベルにまで引き上げたのである。

Suhrkamp の経歴をたどればその様々な職業の体験が Frisch を育てる際の力になり、彼が Frisch の指南役としていかに相応しかったかが理解できる。長年経験してきた教育者として人を育てる意欲と能力と経験、命を賭して人を導く特攻隊長としての軍隊時代の体験、生と死のぎりぎりの境目で会得した信頼関係の築き方、強いられた強制収容所ので過酷な日々を耐え抜いた強固な意志などなど、これまで積み上げてきた様々な人

生経験と、自分自身の文学や演劇の素養と愛着に加え、ダルムシュタット時代に行った作家としての試みと演出で身につけた舞台作品に関する知識や経験などを背景に、さらに自分の出版社を一流のものにしたいという希望、そして最高の作品を世に送り出したいという出版人としての矜持ともいべき崇高な気持ち、それらが相まって彼の Frisch に対する関わりと立場が構築されているのである。とりわけ出版者として上質の文学作品を世に出したいという彼の願いは強く、それを叶える可能性の一つはこの Max Frisch かもしれない、いやこの男である、と思ったのである。それゆえに Frisch を育て上げる価値のある男と認めたからこそ、彼は Frisch に真摯に対峙した。Frisch が書き、その書いたものを厳密に読み込み、あらゆる角度から分析し、ある時は自分の判断だけではなく、Annemarie や Eppelsheimer の意見も参考にして読者の立場から Frisch の作品を厳しく評価した。彼は正確に、一語一句おろそかにすることなく Frisch の作品を考察し、吟味し、分析し、一切の妥協を許さなかった。率直に問題点や修正すべき点を指摘したが、それらは Frisch にとって耳触りの良いものばかりではなかった。むしろその真逆のことが多かった。だが Frisch はその彼の妥協しない姿勢に素直に反応し、修正を加えることによって誠意で答えたのである。Frisch が彼の意見を無視したり、耳を貸さないことは一切なかった。Frisch は彼の指摘やアドバイスの的確さを認識し、全面的に信頼して、すべてに応えたのである。

1950年1月31日に行われた Suhrkamp 社の第4回『出版社の夕べ』で新作 „Graf Öderland“ の一部を Frisch が朗読した際、Suhrkamp は参集した聴衆に次のように Frisch を紹介している。

「皆さんは Max Frisch 氏を間もなくご自分でご覧になり、お聞きになるでしょう。もしかしたら皆さんは、私が初めて彼に会い、話をした時と同じ印象を抱かれるかもしれません。大成するに違いない作家が来てくれたのだな、と<sup>18</sup>。」

この言葉はまさに Suhrkamp の Frisch 評そのものである。「大成するに違いない」ということはまだ完成されていないこととさらに向上する可能性を秘めていることを指しているのである。それはただ時間の経過がなさしめてくれるのではなく、努力という裏付けがあって初めて可能となるのである。ただし、Weidemann によれば、この時点で Suhrkamp はこの若いスイス人作家への思いに幾ばくかの揺らめきがあったと指摘している。つまり、Frisch の作家力への絶対的な確信を持つと同時に、彼が期待に応えてくれるか、ということへの若干の疑念である。Suhrkamp にはすでに Frisch への変わらぬ心構えができていたが、Frisch の側にもその姿勢がなければ協力関係は生じない。Frisch がどれほど勤勉に、どれほどの向上心を持ち、時間と労力を費やして、さらにどれほどの真摯な態度と勇気で創作活動をする心構えができているのかということへの不安が僅かではあるがまだ払拭しきれないでいたのである。それを確認するには少しばかりの時間が必要であった。そして Suhrkamp が Frisch にその揺るぎない姿勢を示すべき機会がすぐに訪れた。具体的には Frisch の4番目の舞台作品 „Als der Krieg zu Ende war“ に Suhrkamp が強い疑念を抱いたことである<sup>19</sup>。それは Suhrkamp が Frisch と親交を結んだ最初の年であったが、彼の新しい作品 „Als der Krieg zu Ende war“ をどう評

価値するかについて、最も厳しく „nichts“ と伝えているのである。„nichts“ という言葉は『何もない』という意味であり、この作品には『何の価値もない』と断じているのである。彼は Frisch に対してその根拠を4ページにわたる書簡で詳細に説明した。実際に戦争に関わり、兵士として勤務し、生死の狭間で極限状態を生き延びてきた Suhrkamp にとって、現実の戦争は生々しく、過酷な事実であった。彼はその消し去れぬ記憶を真の戦争を体験していない Frisch に伝えねばならなかった。Frisch 自身も確かに兵士としての体験はあったが、銃火を交えることのなかった永世中立国スイスの砲兵としてであり、実際に前線で砲火の中に命を賭した交戦国ドイツの兵士のそれとは乖離していた。Frisch に対して最初から厳しすぎるほどの態度で接することは Suhrkamp にとって一種の冒険でもあった。この容赦ない評価に対して Frisch が不愉快に感じたり、二人の関わりがこじれてしまったり、あるいはそのことが原因で Frisch が彼のもとを離れてしまう可能性は十分すぎるほどにあったばかりではなく、二人の関わりはそれで終わってしまうこともありえたのである。しかし Suhrkamp は率直な評価への Frisch の反応に賭けていた。この厳しい評価は誠実さを示すことの証以外何ものでもなかった。そのことを Frisch が理解しないならば、理解できないならば、二人の関わりがどのような結果になろうともその場合はやむを得なかった。一方が自分を抑えたり、何かを我慢して妥協するならばその関わりが長続きすることはない。しかし Suhrkamp の予想ではそうはならないはずであり、その確信があった。彼はスイスでしか通用しないものを Frisch に求めているのではなく、ドイツ語圏全体で普遍性のあるものを求めていたのである。そしてまさしく Suhrkamp が予期した通りに Frisch は反応したのである。それゆえに、„Als der Krieg zu Ende war“ が Suhrkamp に酷評された時、Frisch はそれを書き直すことによって、期待に応えるとともに、その作品をより考察し、練り上げ、質を高めたのである。激しい戦争を自ら体験し、第一次世界大戦では命をも惜しまぬ行動に勲章をもらい、第二次世界大戦中は強制収容所での過酷な生活まで体験した Suhrkamp から見れば、実戦経験の全くないスイス人の Frisch が戦争を描くことに無理が生じるのは自明だった。しかしその作品を „nichts“ とまで酷評されてもそれは作品をより高度なものにするための励ましであると信じ、なお Suhrkamp を信頼し、彼を慕う Frisch に、Suhrkamp は真心で接したのである。果たして Frisch は彼の説明に納得し、その真意をくみ取り、Suhrkamp のもとを離れることはなかった。Suhrkamp の眼に狂いはなかったのである。Frisch は彼の指摘の正しさを認識したのである。確かに、本当の戦争を知らないスイス人の彼が戦争を描き、激しい戦争を実際に体験したドイツの人たちにそれを示したとき、Frisch の思い描くものとはあまりにも違う反応があることをまざまざと知らされたのである。創作にあたっては彼が今までそれほど考慮してこなかった、受け止める側の反応も考慮すべきことを知らされたのである。安易な、あるいは配慮の足らない創作姿勢は厳に戒められなければならなかったのである。Frisch は目からうろこが落ちるように新たな視野が広がったのである。そのことに気付かされた彼はその後の創作においてより深い作品省察の上で創作することになるのである。より多くの読者を前提に作品を執筆するならば、スイス人だけではないあらゆる読者の側に立って作品を

今一度考察する配慮が求められるのである。それは例えばドイツでも受け入れられる大きな要素の一つなのである。このことは、後に彼の作品が翻訳されて世界中に読者層が広がっていった際になお重要なこととなっていった。Frisch に当時欠如していたこの創作上の観点を Suhrkamp は指摘したのである。その意味で Suhrkamp が Frisch と同じスイス人ではなく、別な道を歩んできたドイツ人であったことが、より普遍性を持たせることに大きな効果があった。彼のぎっしり書き込まれた手紙の中には一つ一つ細目にわたって、なぜ彼が Frisch のこの新しい作品を失敗作と思っているか、そして手元にある形式のままでの舞台上演や出版などは思いとどまるよう詳述しているという。その後の Frisch はこれらの点を常に意識して創作活動をすることが当然となっていった。Suhrkamp の助言によって言わばステップアップしたのである。

この一件は Suhrkamp がすべての作品の冷静で賢明な、隅々まで精密に読み取り分析する読者であり、厳格で一切の妥協を許さない情け容赦ない批評家であることを明確に示し、感じたこと、共感できないことは包み隠さず伝えることを Frisch に知らしめたのである。Suhrkamp には最初が肝心であった。Frisch を開花させ、一流の作家へと導くには手綱を緩めるわけにはいかなかった。それゆえに彼は欠点や誤りを大目に見てしまふなれ合いの関係になることは絶対に避けなければならなかった。常に厳しい態度で接し続けることで、二人の間には信頼関係に裏付けされた緊張感が存在したのである。それは相手に対する呼称にも表れていた。二人称単数に対する呼称の „Sie“ はある程度親しい関係になれば親称 „du“ に変わっていくのが普通の成り行きだが、彼らの間では „Sie“ を使い合うという取り決めがあった<sup>20</sup>。これは二人の関わりがなれ合いにならず、親しみは増そうとも常に一定の間隔を置き続けるという意味であった。この二人の間で交わされ続けた人称代名詞 „Sie“ を Frisch は「正しさと隠し立てのない誠実さ、さらに加えて情の細やかさ、決してなれなれしさに変わらない、人として接する上での思いやりのある „Sie“ のままだった」と回顧している<sup>21</sup>。

Frisch に可能性を見出ししていた Suhrkamp にとって、実はこの時期極めて困難な厳しい状況であった。つまり彼は彼自身の出版社を創立する直前であり、そのために新しい作家たちを、ドイツ語圏からの新しく、才能ある、強力な声を必要としていたのである。一人でも多くの作家を彼は必要としていた。彼は Max Frisch をそのような希望の担い手の一人と考え彼に対峙していたのであり、この時期に Frisch を失えば、それはあまりにも大きな損失になるであろうことは強く認識していたのである。しかし彼は Frisch が彼の思いを酌むに違いないと信じて疑わず、率直に意見を述べ、アドバイスを送り続けた。そして Frisch は彼を信頼し、厳しい意見にも耳を傾け、彼のもとを離れなかった。そこに真の友情と信頼関係が芽生えたのである。

Suhrkamp は自分の出版社を立ち上げ、彼の出版社から新しい作品を送り出そうとした時、彼には最高のドイツ文学を世に出したいという気高い思いがあった。そして、かつて教師として若者たちを育てた経験はここでも発揮されることになるのである。彼は教育者のように Frisch を一流の作家に育て上げようと考えたのである。その思いはたしかに届き、Frisch は Suhrkamp の期待に応えようと懸命に努力したのである。そして

Suhrkamp は Frisch の秘めた潜在能力を高く評価し、さらに上のものを求めたのである。求めることこそ Frisch に対する高い評価の証だったのである。Frisch もまた彼の意見に耳を傾け、互いに議論をし、Suhrkamp の指摘に納得した場合は作品を修正し、そういう過程を経て、さらに作品の文学的価値が高まっていった。ここに最も実り多い二人の協力関係が構築されていくのである。Frisch は出来上がった原稿だけではなく、しばしば未完成の原稿も Suhrkamp に送り、彼の評価を仰いだ。それに対し Suhrkamp は誠実な態度で対応し、歯に衣着せぬ反応を示した。Frisch は Suhrkamp の確かな判断を心から頼りにしていたのである。Lioba Waleczek はまた次のように指摘している。

「Peter Suhrkamp は単に経済的観点を追い求める出版者ではなく、社会に積極的に参加している同時代の人たちと同じように、自分自身を批判力のある出版者であると思っていたのは明確だ。出版者として彼は一途に文学の促進に打ち込んでいたのである。その中には、集中的に、個人的に、作家たちを世話するということも含まれている。Frisch はそのことによって非常に大きい利益を得ているのである<sup>22</sup>。」

まさにこの指摘通り、二人は強いきずなで精神的に堅固に結ばれていた。

作家 Frisch と出版者 Suhrkamp の間には絶対に崩してはいけない部分があった。つまり、信頼関係とは単に精神面だけではなく、金銭的にも常に明確であらねばならなかった。このことを維持し続けることは絶対の前提条件であった。そして Suhrkamp は常にそれを守った。二人の関わりは Frisch のみに利益をもたらしたのではなく、付随的に Suhrkamp にも利益をもたらしていたのである。つまり、Frisch の描き出す文学作品は、まず Suhrkamp に受け入れられることが、ドイツ語圏で受け入れられるための最初の関門であった。そこを通過すればこそ、さらに広く受容される可能性は高まったのである。そのことが Frisch の読者を増やすことにつながり、それは作品の販売部数を増加させた。それがひいては執筆料や出版物の売り上げに直接結びつくのである。Frisch が世に受け入れられるにつれその収入が多くなっていくのは当然であったが、それは同時に彼の本を出版している Suhrkamp 社にも多大な利益をもたらすことになるのである。二人の間わりと、両者の収入は同時に拡大してゆき、信頼関係も同時進行的にさらに深まっていったのである。そこには Suhrkamp に文学の素養に関する確かな自信と、絶対に相手を裏切らないという対人関係上の姿勢がなければ、このような関わりが長く継続することは不可能であろう。その上に、才能を見抜く力に一寸の疑問をも抱いていないのである。この男は育てれば大化けするに違いないという慧眼力、それこそが一流の出版人の能力かもしれない。そして Frisch も彼に絶対の信頼を置いていた。Frisch のために大きな時間を割いてその作品を隅々まで検討してくれる、それは仕事上の関わりを超えたものである。1954年6月、長編小説 „Stiller“ が完成するまであと僅かという時期に、アドバイスを送り続け、励まし続けた彼に Frisch は次のような書簡を送っているのである。

「私はあなたに対し、われわれが „Stiller“ について話し合ったことを重ねて御礼申し上げます。それは私にとってたくさんの、そして重要な推進力となりました。私には、そうなのです、推進力が必要なのです。私に可能な点にまででも、一人では到達することができないでしょう。これが私の仕事の悪い点であることをご存じでしょう。到達し

ようと努力しているその頂上の前のどこかで私は腰を降ろしてしまい、休憩し、忘れてしまい、残りの部分を省いてしまうのです<sup>23</sup>。」

この文には多少の社交辞令が含まれているにしても、Frisch が Suhrkamp をいかに頼りにしていたかが十分に読み取れる。Suhrkamp は彼の作品の巧拙だけではなく、作品に立ち向かう精神性をも叱咤激励し続けてきたのである。そのことが休んでしまいそうになる Frisch を元気づけ、立ち上がらせ、心を奮い立たせ、前へと進ませたのである。妥協しそうな時、あるいは手を休めてしまおうとする時、励まし、叱り、手を取り、前に、そしてより高いところへと進ませてくれたのが Suhrkamp なのである。

#### 4. Suhrkamp との別れ

Suhrkamp は Frisch を一流の作家に育て上げた。彼もまた一流の伯樂であったのである。育てようと思う伯樂と、それに応じて向上しようとする作家のお互いの協調があって初めてその効果が生み出される。その意味では Frisch が創作したものを精査することによって Suhrkamp の批評力も鋭利になっていったともいえるかもしれない。この二人の関わりはまさに力を合わせ、一つの作品を少しでも文学的価値の高いものに仕上げようとする気高い意志のぶつかり合いの連続であった。それゆえに、充実した、実り多い、かけがえのない時間であったのである。二人の間の年齢の差を超越した男同志の友情、厚い信頼関係が構築されていったのである。しかしそれぞれに与えられている時間は限定されたものであり、二人の関わりが終焉を迎え、別離するべき時は運命として訪れるのである。Suhrkamp がその生涯を閉じるとき、その時こそ Frisch が最終的に立ち立しなければならぬ時期であったのである。他の誰にも頼らずに生きていくべき時の訪れ、そのときに Frisch 自身が成長を遂げていなければ、作品の質は低下する。Frisch の真価が問われる時が訪れたのである。はたして Suhrkamp の意図したように Frisch は作家として成長を遂げていたのか、それは、特定の人からの助言もなく、自分ですべてを判断し、独力のみで創作した彼の作品が物語るのである。Suhrkamp 亡き後の彼の作品は、純粹に Frisch 個人の作家力によって生み出されたものなのである。

最晩年、Suhrkamp はフランクフルトの大学附属病院で病に伏していた。Frisch は3月28日、Suhrkamp の最後の誕生日を病院に見舞った。Frisch は3日間フランクフルトに滞在したが、最初の5分間で二人の別れは行われた。二人は臨終の間際にまでも „Sie“ で話し合った。Suhrkamp は自分の死期を悟っていた。後日 Frisch は „Peter Suhrkamp“ と題した惜別の文を記し、その中で追憶しているが、「この人の偉大さに瞬時たりとも疑念を抱いたことはない。彼の勇気と誠実さは格別であった」と評している<sup>24</sup>。むろん Frisch は彼の人生のすべてをではないが、大きな出来事や経歴は知っていた。農民の出身で、第1次世界大戦中は特別攻撃隊の指導者であったことも知っていた。ゲシュタポに苦しめられたことも Suhrkamp はたった一度だけ、ほんの僅かだけ話したことがあったが、Frisch にはそれで十分だった。「多くの人たちを Suhrkamp は愛していたし、周りのみんなが決然としている時、躊躇する勇気を持っていた。Suhrkamp は頑

固だと言われる。確かに彼は石頭だと私には思われた」と述べている<sup>25</sup>。この一途な頑固さと信念を曲げない頑なさが Frisch に厳しい態度で接しさせ、能力を引き出させたのである。彼は彼の出版社に関わったすべての人たちに家長の心遣いを持っていた。そして、最も可愛がったのが Frisch だったのである。Frisch の追憶をしばし引用してみよう。

「Suhrkamp の状態がより悪くなった復活祭の日曜日に、彼は私に、病室に残って新聞を読んでほしいと頼んだ。彼はたった一人でいることに不安を覚えていた。私は彼が命じたとおりウイスキーを一杯飲んで、彼をそっとしておいた。しばらくして私は、彼が喉をぜいぜい鳴らすのが増えて、その後途切れたのを聞いた。そして目を閉じた彼の顔はほんの瞬間的に見分けがつかぬ状態に陥った。私は臨終の苦しみが始まったのだと思った。そして Suhrkamp にあえて話しかけなかった。その名前が突然ふさわしくなくなった。とりわけ彼の最後の付添人が私なのはふさわしくないのに、医者と呼ぶために私が立ち上がった時、彼が新聞をかさかさと言音を立てるのを聞いた。そして彼の顔が再びそこにあった。彼が完全に安心できる状態になった後で、すべての窓が開けられて、彼は我々が何について話をしていたか知りたがった。そして私のことについて話をしていと言いつ張った。再び彼は、私がどうしたらよいのか全く分からないほどに高圧的に意見をいう様相を呈してきたので、私はそれに同意するでもなく、反論するでもなく聞いていた。それは私にはいつも、遅かれ早かれまったく違った形で出現する、ある現実的な予感のリサイクル製品のように思われた。我々が復活祭の月曜日に Suhrkamp を最後に見舞った時、前回我々が中断しなければならなかったまさにその点から彼は会話を続けた。Suhrkamp はいつものように身だしなみをきちんとして安楽椅子に座っていた。そして彼のベッドに腰を掛け、復活祭のものを味あわなければならなかった若い女性の訪問を喜んでいた。青空の広がる夏のような日のことだった。しばらくの間、彼の覚醒状態に良い心持になって、この心気症患者の不死を信じて再び慰められるような気がした。Suhrkamp が最初にその見舞いの女性と二人だけで話をした後、明るい、そして懇懇な会話があった。医者たちが入ってきたとき、突然そこにはもはや時間が無くなった。私は、今開けられた窓のそばの安楽椅子に彼が座っているのを見るのは最後だろうと知っていた。我々は手短に、握手することもなく、ただ元気なく手に触れただけで、急いでくれるよう頼みながら Suhrkamp は Jaja と頷いていた。そしてなんだか何か忘れたように、私がドアのところで立ち止まった時、フランクフルトやチューリヒの駅で何度も交わした時とは違って、彼は右手で合図した。彼はとても美しかった。

外の廊下で待っていた我々が医者たちと話をした後で、私は「彼の Ja を聞くために今一度ノックしなければならなかったにもかかわらず」もはや部屋には入らず、我々はすぐに帰宅した。そして翌朝、思っていたよりも早く、死の知らせが届いた。

私は Peter Suhrkamp を愛していた<sup>26</sup>。」

Suhrkamp は1959年3月31日息を引き取った。享年68歳であった。

生前 Suhrkamp は北海に面したジュルト島のカンペンが好きだった。そこには彼の3番目にして最後の妻 Annemarie Seidel が前夫 Anthony van Hoboken と一緒であった時



に所有した家屋敷があった。この屋敷は1929年に建設され、干潟のある北海にすぐ面していた。この別荘には Frisch も家族ともども招かれたこともあった。Suhrkamp の手書きの遺書によれば、死後彼の遺骨はこのジュルトで北海に散骨してほしいとのことであったが、この埋葬の方法は法的に禁じられており、その願いはかなわず、茶毘に付された後に、同じジュルト島のカンペンのやや南に位置するカイトゥムにある聖セヴェリン教会の墓地に納められ、そこに永眠している<sup>27</sup>。Suhrkamp の死の同日が、重いアルコール中毒に陥っていた妻 Annemarie との離婚の期日であるはずであった。

それから2年後、Frisch の不朽の名作 „Andorra“ (1961) の初演は Hirschfeld が演出を担当し大きな反響を呼んだのである。Suhrkamp が健在であったならば、どれほどその成功を喜んだであろうか。そしてさらに3年後、Frisch が53歳の時、つまり1964年11月8日に、もう一人の良き助言者であったこの Kurt Hirschfeld も62歳で世を去ったのである。

壮年期に至るまで Frisch のかけがえのない友人であった Suhrkamp の死去と共に、二人の交友関係は終わった。さらに劇場での親友 Hirschfeld も亡くなり、頼りになる相談役、耳を傾けてくれる友、支えてくれる仲間はこの世を去って行ってしまった。今、真の意味で Frisch は独り立ちしなければならなかったのである。もうほかの人を頼ってはいけなかったのだ。しかしこの時点ですでに Frisch の文学的水準は高められ、一流の域に達していたのである。Frisch の独り立ちを Suhrkamp は確信していたに違いない。なぜなら Frisch が見舞った臨終の床で彼は Frisch の仕事を気遣いながらも「もう私の助けを当てにしないでくれ！」<sup>28</sup>と口にしたのである。この言葉は2人称の親称複数に対する命令文であり、Frisch 個人に対してのみ当てはまるのかは微妙だが、「もう手助けはできないよ」という意味だけではなく、「君はもう誰の助けもいらないんだよ、一人で立派にやっていけるんだよ」とも受け止められる。おそらく後者であろう。そしてその言葉は誤りではなかった。

Frisch は今やあらゆる意味で独り立ちしなければならなかった。他の力に頼らずに、作品の質を落とすことなく、文学に立ち向かわなければならなかった。無論彼らを上回るような無条件に信頼のおける相談相手がその後現れることはなかった。作家としての後ろ盾は無くなり、彼はその後の人生を一人で歩き続けたのである。そのあと彼は、すべて自力で作品を書き続けた。そして Suhrkamp が見抜いていた通り、Suhrkamp 亡き後に „Mein Name sei Gantenbein. Roman“ (1964), „Tagebuch 1966-1971“ (1972), „Dienstbüchlein“ (1973), „Montauk. Eine Erzählung“ (1975) などの力作を発表し、Frisch の作家としてのレベルが揺るぎないものであることを明らかにした。その後上述した以外のさまざまな受賞歴、名誉学位の受領などはその証の一つと言える。Suhrkamp はすぐれた作家を育て上げたのである。

## 5. 結び

人生の荒波をくぐり抜け、様々な体験をしてきた Suhrkamp との運命的な邂逅、これは Frisch にとって、作家として大きく飛躍するうえで不可欠な出会いであった。また Suhrkamp にとっても、Frisch の作品は彼の経営する出版社の売りに大きく貢献し、その安定的な経営に寄与することになるのである。20歳の年齢差は Frisch にとって、理解ある父親のような存在であり、Suhrkamp にとっては、まじめで向上心に燃えた青年に思えたのであろう。Suhrkamp は Frisch を一流の作家に育てようと思ったのは疑問の余地がない。年齢差はあれ、男同士が胸襟を開いて文学への熱い思いをぶつけ合う、そのほのぼのとしたひと時は Frisch の人生でこれまで経験したことのない、満ち足りた時間であったのである。Frisch は純粋に気の合う友人の出現に陶醉し、そしてそれは Suhrkamp も同じであったと思われるが、実は Suhrkamp は同時に Frisch を冷静に観察していた。Frisch という人間は彼が目をかけるに足る作家であるのか、鍛えれば作家として大きく育つ逸材であるのか、それだけの値打ちを秘めた男であるのか、それが最初の時の Suhrkamp の思いであったことは十分に推測できる。そして最初の出会いの数時間で Suhrkamp には充分であった。Frisch は言わば彼の口答試験に合格したのである。Frisch はこの時から Suhrkamp との関わりを日ごとに深め、創作の度に彼の助言を仰ぐようになったのである。それは彼の作品の価値を高めることになったのである。

1947年に知り合い、1959年に Suhrkamp が死去するまでの約12年間の交誼、それは単に作家と出版者の関わりではない。育て上げようとする者と向上しようとする者の熱い関わりであった。Suhrkamp は、出版社の経営者として成功するよう努力するとともに、一流の作家を育てようとしていた。大きな夢だった。彼の出版社にとっては一人でも多くの作家を抱えたい事情があったが、利益よりも、Frisch を育てる方がより重要であった。Suhrkamp の心がけははるかに気高いものであったのだ。もし Frisch が彼の出版社を抜けたら、それは大きな打撃になることであつたらう。しかしそのような不安は無用であった。長い期間ではなかったが、二人は精神的に強い絆で結ばれていた。Suhrkamp は彼に変わらぬ態度で接し続け、Frisch もすべての作品を彼の出版社から出し、信頼関係を維持した。

Suhrkamp が存命中 Frisch は、„Tagebuch 1946-1949“(1950), „Graf Öderland. Ein Spiel in zehn Bildern“(1951), „Don Juan oder Die Liebe zur Geometrie“(1951), „Herr Biedermann und die Brandstifter“(1952), „Stiller. Roman“(1954), „Homo faber. Ein Bericht“(1957) などの作品を世に出した。これらの作品によって Frisch は、1955年ブラウンシュヴァイク市より『Wilhelm Raabe-Preis』を受賞し、スイス・シラー財団から『Schiller-Preis』を受賞、1958年には『Georg Büchner-Preis』、『Literatur der Stadt Zürich』を受賞した。これら様々な受賞歴と、生み出された作品群は Max Frisch をドイツ語圏で最も人気のある一流の作家に押し上げ、Suhrkamp 出版社に多大な利益をもたらしたのである。Frisch を育て上げることが結果的に文学的価値の高い作品を世に送り出すことになり、ひいては自分の出版社の価値を高めることにもつながったのである。

Frisch は Suhrkamp 出版社の看板作家となり, Suhrkamp 社もドイツ一流の出版社となった。

〔注〕

- 1 Schütt : S.386.
- 2 Waleczek : S.76.
- 3 Oskar Wälterlin (1895-1961) は1938年以来チューリヒのシャウシュピールハウス劇場の支配人であり, 1961年に逝去するまで, その地位を占めていた。
- 4 Frisch: Rede zum Tod von Kurt Hirschfeld. in:Gesammelte Werke V.
- 5 ebd. Frisch は幾度となくドイツを訪れており, Hirschfeld への弔辞の中で触れているこの1948年の訪独からの帰路は, Suhrkamp と知り合った1947年の訪独とは異なる。
- 6 Waleczek : S.75.
- 7 Tagebuch 1946-1949 : S.524.
- 8 Weidemann : S.146.
- 9 アビトゥア (Abitur) とはドイツの高等学校卒業資格試験のことで, 同時に大学入学資格も兼ねる。
- 10 Wikipedia などの情報によれば, 一説には1923年9月29日から1924年12月30日までの期間二人は結婚していたとの説もあるが, Suhrkamp は否定したという。
- 11 Unseld: S.78.
- 12 Unseld: o.a.
- 13 Unseld: S.102f.
- 14 Weidemann: S.146.
- 15 Wilhelm August „Willy“ Fleckhaus (1925.12.21-1983.9.12)
- 16 Martin Hürlimann (1879.11.12 - 1984.3.4) はスイス人の出版業者で, Atlantis 出版社の創設者で, 雑誌『Atlantis』の発行者。
- 17 Schütt : S.385f.
- 18 Weidemann : S.146.
- 19 Weidemann : S.147f.
- 20 Frisch : „Peter Suhrkamp“ in ; Gesammelte Werke in zeitlicher Folge Band IV 1957-1963, S.253.
- 21 ebd.
- 22 Waleczek : S.75f.
- 23 Jetzt ist Sehenszeit: S.138
- 24 Frisch : „Peter Suhrkamp“ in ; Gesammelte Werke in zeitlicher Folge Band IV 1957-1963, S.254.
- 25 ebd.

- 26 ebd.
- 27 この散骨の希望は Frisch にヒントを与えたと思われる。Frisch は死後、自分の希望に従ってベルツォーナにある山荘の庭に散骨されたが、Suhrkamp の思いに触発されたとも思われる。
- 28 Frisch : Gesammelte Werke in zeitlicher Folge Band IV 1957-1963, S.253. „Zählt nicht mehr auf mich!“

〔参考文献〕

- Max Frisch Gesammelte Werke in zeitlicher Folge, Sechs Bände. hrsg. von Hans Meyer unter Mitwirkung von Walter Schmitz. Suhrkamp Verlag, Erste Auflage. 1976.
- Max Frisch Entwürfe zu einem dritten Tagebuch. Erste Auflage. Suhrkamp Verlag Berlin, 2010.
- Max Frisch, Sein Leben in Bildern und Texten. Hrsg. von Volker Hage. Erste Auflage. Suhrkamp Verlag Berlin, 2011.
- Bienek, Horst : Werkstattgespräche mit Schriftstellern. dtv 291, Carl Hanser Verlag, München. 1962.
- Hage, Volker : Max Frisch. rororo 321. 10. Auflage, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg, Oktober 1995.
- Lüthi, Hans Jürg : Max Frisch. UTB1085. A. Francke Verlag GmbH München, 1981.
- Mayer, Hans : Über Friedlich Dürrenmatt und Max Frisch, Verlag Günter Neske Pfullingen 1977.
- Petersen, Jürgen H : Max Frisch Stiller, Verlag Moritz Diesterweg GmbH & Co., Frankfurt am Main. 1994.
- Petersen, Klaus – Dietrich : Max Frisch – Bibliographie. In; Über Max Frisch. hrsg. von Thomas Beckermann, editon suhrkamp, 5. Auflage, 1974, Frankfurt am Main.
- Schütt, Julian : Max Frisch Jetzt ist Sehenszeit Briefe, Notate, Dokumente 1943-1963. hrsg. von Julian Schütt. Suhrkamp Verlag. Frankfurt am Main, 1998.
- Schütt, Julian : Max Frisch. Erste Auflage, Suhrkamp Verlag Berlin, 2011.
- Stäubli, Eduard : Max Frisch. Vierte, unveränderte Auflage, Erker-Verlag, St. Gallen, 1971.
- Unsel, Siegfried : Peter Suhrkamp, Eine Biographie. Suhrkamp taschenbuch 3597. Erste Auflage 2004. Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1991.
- Walczyk, Lioba : Max Frisch, dtv 31045. Deutscher Taschenbuch Verlag GmbH & Co. KG, München, April 2001.

Max Frisch と Peter Suhrkamp

Walter Schmitz : Zur Entstehung von Max Frischs Roman »Stiller«. In : Materialien zu Max Frisch „Stiller“ Erster Band. hrsg. von Walter Schmitz, Suhrkamp-taschenbuch 419,1978.

Weidemann, Volker : Max Frisch, Sein Leben, seine Bücher. Verlag Kiepenheuer & Witsch, Köln, 2010.

**(Abstract)**

Für schweizerischen Schriftsteller Max Frisch ist deutscher Verleger Peter Suhrkamp unersetzlich. Als Frisch etwas Manuskript schrieb, mochte er zuerst immer um ein Urteil von Suhrkamp bitten, weil er auf Suhrkamp vom Herzen vertraut hatte. Hier soll die Beziehung zwischen Max Frisch und Peter Suhrkamp ausführlich überprüft werden.